

第 10 回和漢比較文学会特別例会発表要旨集

2017 年 5 月 5 日作成 和漢比較文学会特別例会実行委員会

相田満(委員長)・堀誠(副委員長)・木戸裕子・藏中しのぶ・高兵兵・合山林太郎・

朱秋而・新聞一美・谷口孝介・陳明姿・塚越義幸・三木雅博・三田明弘・丹羽博之 [事務局]

学術交流会 企画セッション 8 月 29 日(火)

生誕 150 周年夏目漱石学術サロン

趣旨説明 合山 林太郎(慶應義塾大学)

討論 高 兵兵(西北大学)&学生有志

詩吟 金 中(西安交通大学)

2017 年は、夏目漱石生誕 150 周年にあたり、様々な漱石関連のイベントが開催されている。漱石は単に近代日本を代表する文学者というだけでなく、漢詩を多く制作した人物でもあり、中国においても、近代日本を代表する漢詩人として、内藤湖南とともにその名が知られている。しかし、漱石の漢詩はきわめて解釈が難解であり、その評価も決して一様ではない。日本では吉川幸次郎『漱石詩注』以来、高い評価が与えているが、中国古典詩として見た場合、どのように位置づけ得るものなのか、中国、日本をはじめとする東アジアの研究者が自由に討論し、検討すべき問題であると思われる。本集会では、同時通訳を用いながら、中国(日本語を話さない中国文学者を含む)と日本の研究者が漱石の漢詩について討論を行う。なお、漱石の漢詩作品は約 200 首程度あるが、修善寺の大患前後の作品、『明暗』執筆時の作品を取り上げることがを予定している。(なお、本企画は国文学研究資料館・歴史的典籍ネットワーク事業による公募型共同研究「日本漢詩文における古典形成の研究ならびに研究環境のグローバル化に対応した日本漢文学の通史の検討」[代表:合山林太郎]による成果の一部です。)

白居易愛好詩社(代表:張居仁氏)との交流

聞き手 高兵兵

長恨歌の旅をテーマとするエクスカーションに先立ち、西安で白居易詩を愛好して永年同人活動を続けているグループの代表に白居易氏詩の魅力を語っていただき、あわせて和漢比較文学会会員との対話を通じて、中国における白居易享受の現在と展望をうかがう。

【特集1】東アジアの文化と民俗(陳潮涯・項青・菊地真)

1. 「首が落ちた話」と中国古典文学一切断した首という発想を巡って—

陳 潮涯(ちん・ちようがい)

大阪大学文学研究科文化表現論専攻比較文学 博士後期課程

大正六年十二月、芥川龍之介は「首が落ちた話」を書き上げ、翌年一月号の『新潮』に掲載した。日清戦争で首が切られた清の兵士、何小二が奇跡的に生還したが、一年後酒樓で飲み仲間と喧嘩した途中、首がまた落ちてしまい、命を落とした話である。この話と中国文学との関係については、諸先行研究が指摘したように、『聊齋志異』の「諸城某甲」から首が切られても死なないという発想を取ったことがわかっている。この点は「首が落ちた話」の本文にも明確に示されている。

しかし、『聊齋志異』の中で、首が切られても死なないというような話は「諸城某甲」だけではない。また、『聊齋志異』のように、芥川によく材料を取られた『太平広記』の中でも類似する話がある。「諸城某甲」以外にも、「首が落ちた話」は複数の中国古典文学から取材した可能性がある。

首が切られても死なないこの発想を巡って、芥川は僅か二百字の「諸城某甲」を「上」「中」「下」という三つの部分を含む、約八千字の短篇小説に発展させた。「首が落ちた話」発表の少し前、芥川は「材料と自分の心もちとが、ぴったり一つにならなければ、小説は書けない」(「私と創作」、『文章世界』大正六年七月号)と自身の創作態度を述べた。が、今まで先行研究は、「首が落ちた話」の反戦思想や語りの構造に多く集中している一方、主な材源となった「諸城某甲」が「首が落ちた話」の中でどのような意味を持つのか、まだ十分に分析されていない。

本発表では、まず「首が落ちた話」が材を得た中国古典文学について再考察する。原典の中で切断した首、奇跡的生還などのモチーフが何を意味しているのかを分析した上で、芥川の「首が落ちた話」の中で、これらのモチーフがどのような新たな意味を与えられたのかを考える。最後に、芥川以前の『聊齋志異』日本受容の背景を踏まえ、「首が落ちた話」の新しい読みを試みたいと思う。

2. ベトナム漢文小説「鴻雁氏伝」における卵生神話の受容

項 青(こう・せい)

熊本県立大学 非常勤講師

今回、越南漢文小説集成所収『嶺南撫怪列伝(甲本)』の「鴻雁氏伝」を中心に考察したい。

「鴻雁氏伝」は、かつて三品彰英氏が『神話と文化境域』所収「南方系神話要素・卵生族祖神話」の中で例として紹介したことがあるが、本話全文が取り上げられず、中国の伝承との関係等は判然としなかった。

この話の概略は以下のとおり。

炎帝神農氏の子孫・涇陽王と洞庭君の龍王の女との結婚で、貉龍君が生まれた。後に、この貉龍君は北方の帝の娘・嫫婁と結ばれ、二人の間に一胎(肉塊)が産まれるが、その一胎から百の卵が生じ、更にその一つずつから男の子が生まれた。その百人の男の子のうち、五十人は水の民として父君と水府に帰り、五十人は山の民として母君と陸上で暮らすようになる。母君と南に帰った男の子の中から、勇者をベトナムの王とした。山の民である子孫たちは、蛟龍等の被害から身を守るため、父君から「私・貉龍君の形の入れ墨をすれば、水怪の難を逃れられる」と、入れ墨を入れることを許してもらった。これが百越の文身(入れ墨)の始まりであるという。

この話には、ベトナム王国の始祖が卵から生まれるという要素がみられる。加えて、中国の六朝・唐・宋以

後の志怪小説や地方伝承等に見られる、水族との異類婚の影響も確認することが出来る。

本発表では南中国(百越文化圏)と東南アジアの伝承、また日本の記紀神話等を比較解析することで、古代における漁撈民集団の有り様の一端を見いだしたい。

3.東アジア文化の造りあげた棋盤

菊地 真(きくち・まこと)

北京理工大学外国語学部 外国專家

これまで「将棋の研究」というと、ゲームとしての起源やルールの変遷に関する研究が中心だった。将棋盤と駒の形状の起源に関する研究は、そうした研究の補足・傍証としてなされるに留まっていた。こうした背景には、「ボードゲームでは、ゲームのルールがまずあり、道具はそのルールの後に作られる」という考え方がある。しかし、正倉院にある奈良時代将来の碁盤はゲームの用具としてというよりも、むしろ占星術の道具なので、帝王から帝王への贈答品としてふさわしいと考えられたのではなかったか。棋盤は本来、ゲームに使われることと別に考察されるべきものなのである。そのような前提に立ち、日本将棋の盤と駒の独自性は仏教説話に由来するものであることを提唱したのが、2014年1月の日本文学協会中世部会例会発表「須弥山世界と「棋」について」であった。2014年12月韓国日語日文学会大会発表では、日本の将棋コマの名称がすべて経典に由来し、形状が仏具の幡のミニチュアであり、須弥山頂で繰り返されたという帝釈天と阿修羅王の戦争説話を表していたことを論じたのが「棋と仏教説話」である(2017年5月に韓国日語日文学会『日語日文研究』第93輯2巻に掲載)。2015年3月に韓国外語大学で開かれた韓国古典読会例会発表で「棋盤と切利天説話」と題して、日本の将棋盤・碁盤の脚の形状は、経典の須弥山を象徴化したものであることの議論をした。将棋盤の高さが近世までが総高7寸(212mm)であったものが、20世紀の始めのプロ公式戦では9寸(272mm)と約6cmも高くなったことと、日本に正座と座布団が一般化したことに連動することを論じたのが、2016年12月の東アジア古代学会・早稲田大学日本古典籍研究所共催シンポジウム「人類共有資産としての東アジア文史哲」での「棋盤高考」であった。今回はこれらをふまえ、棋盤の形状が東アジア文化の流れの中で、今日我々が目にするような姿に形成されていったことを論ずる。

【特集2】供養の諸相(白雲飛・増子和男)

4.『今昔物語集』における供養観をめぐって

白雲飛(はく・うんひ)

大阪府立大学客員研究員・国際日本文化研究センター共同研究員

「供養」という言葉なしで日本人の民族性や生活を語るのは不可能に近いと思われる。何故なら、日本人は実に様々なものを供養しているからである。古くなった人形を奉納する「人形供養」や殺生した虫の命をなぐさめる「虫供養」や、その他「包丁供養」「うなぎ供養」「筆供養」などがあることが、千葉公慈氏『知れば恐ろしい日本人の風習』(2016年)の「針供養」に挙げられている。「供養」とはインドのサンスクリット語「プージャ」から来た言葉で、敬意を持って、ねんごろにもてなすことが原義だという(『仏教辞典』)。しかし、この言葉は同じ漢字圏の中国では、もっと様々な意味で使われてきた。日本語と同じように先祖の霊を供養することや仏教の三宝(仏・法・僧)に対し、香華・灯明・幡、施物(飲食・衣服・資材等)などを捧げる意もあるが、奉仕のための品物を指す場合や徳を修得する意などにも使う。その他に日常的な営みの「供給」や親孝行の「孝養」などにも使われていた。歴史書に「瞻養」「侍奉」といった「仕える」意味合いの例も多く見られる。例えば、後漢・班固『漢書』巻84の「身既富貴而後母尚在、方進内行修饒、供養甚篤」は、そうした用例の一つであると言えよう。

『今昔物語集』の編者は「供養」の語のこうした中日間の差異について極めて自覚的意識的であったかの

ように見える。例えば、震旦部巻9の「震旦孟宗、孝老母得冬笋語第二」と「震旦丁蘭、造木母致孝養語第三」は漢籍に同・類話がある。しかし、漢籍に「方冬為之出因以供養」や「刻木作母事之、供養如生」と表現している箇所を、『今昔』では、「母ヲ養フ」や「供給」「孝養」に、また「供給スル事、生タラム時ノ如ク也」といった言葉に置き換えて使い分けているのである。

このような「供養」の語をめぐる中国典籍と『今昔』の用法の差異ははたして何を意味しているのか。具体的事例に即してその意義について考察する。

5. ペットをまつる文化—「猫をまつる」を手がかりに—

増子 和男(ますこ・かずお)

茨城大学教育学部 教授

「ペット・ロス・シンドローム」という言葉が世に出て、芸能人の体験などから 広く知られるようになってきた。これに対して、人間関係の希薄な現代人の病であると指摘されているのだが、病的であるか否かはともかくとして、常日頃可愛がっていたペットの死は心痛むものである。

今回の発表では、犬とともに人に愛されてきた猫(家猫)に焦点を当て、この問題を考えてみたい。家猫の起源は、古くは世界各地の様々な種類の野生猫(山猫)が人に近づき、やがて飼われるようになったとする説が行われてきたが、形態学的分析を主とする伝統的な生物学的知見によって、ヨーロッパヤマネコの亜種リビヤヤマネコ *Felis silvestris lybica* が原種とされるようになり、米英独等の国際チームによる2007年6月29日の『サイエンス』誌(電子版)への発表で、DNA解析結果により、家猫の祖先は約13万1000年前に中東の砂漠などに生息していたリビヤヤマネコを共通の先祖に持つということが判明したとされる*。

当初の家猫の飼育目的は、農産物や家具調度品を食い荒らす鼠を退治してくれるという実用性に着目した点にあり、特に中国・日本では、それに加えて仏典などの書物を鼠の害から守るために重宝されたことからとされる。しかし、家猫と同じように、当初は狩猟や防犯などの実用を目的として飼育された犬と同様、その性質や習性は、広く人々の愛すところとなり、愛玩用動物としての地位は年を追うごとに高くなり、他の家畜を圧倒して二大ペットの座を得て今日に至っている。愛犬とともに愛猫は、単なる実用性を越えて、人々のかけがえのない友となり、その死に心を痛め、哀悼の意を詩文に表す人々も増加していった。

本発表では、これらを通じて、日中両国の人々のペットを失った思いを比較考察することとしたい。

【特集3】近世詩人の新視点(任穎・李国寧・紺野達也)

6. 石川丈山の詠物詩について

任 穎(にん・えい)

天津外国語大学 講師

石川丈山は、天正11年(1583)に生まれた。名は重之、後に凹、字は丈山、号は六六山人・四明山人・凹凸窠・詩仙堂など、通称は三彌、後に嘉右衛門である。徳川家康に仕えたが薙髪して京都に閑居、儒学を藤原惺窩の門に遊び、林羅山・堀杏庵と交わる。著に『朝鮮筆語集』、『本朝詩仙注』、『詩法正義』など十余種あり、詩集『覆醬集』3巻、『新編覆醬集』23巻、『凹凸窩詩集』2巻がある。

まず、丈山の生涯について、小川武彦氏の「石川丈山年譜稿 上」及び「石川丈山年譜稿 上(2)」と「石川丈山年譜稿 上(3)」が見られる。丈山の詩論についての研究は、中村幸彦氏の「石川丈山の詩論」がある。さらに、丈山の煎茶との関わりについて、矢部誠一郎氏の「石川丈山と煎茶道」が先行している。また、近年では丈山の研究全般について、山本四郎氏の「石川丈山研究余話」、『覆醬集』の版本研究について杉浦豊治氏の「丈山の『覆醬集』について」、朝鮮通信使との関係を検討した若木太一氏の「朝鮮通信使と石川丈山--「日東の李白」」などが著されている。丈山における杜甫の受容に関して王京氏の「石川丈山における杜甫の受容」、伊藤善隆氏の「丈山の杜甫受容:「拙」をキーワードとして」などが見られる。

さて、本研究は以上のような先行研究を踏まえ、未だに見られていない丈山の詠物詩を取り上げ、そこから丈山が「日東之李杜」として評価される理由を探り、また丈山が近世初期の詩人として、五山の僧侶の詩からどのような進歩を遂げたのか。丈山の詠物詩において、どのような特徴が現れているのかについて検討したい。

7. 林鷲峰と邵康節

李 國寧(り・こくねい)

中山大学外国語学院

本発表は林鷲峰の漢詩文における邵康節の影響を考察したものである。邵康節は司馬温公と同時代の人で、隠逸の詩人であり、易学の大家である。鷲峰は司馬温公と邵康節との交遊に憧れて、自分と親友加藤明友との交遊を司馬温公と邵康節のそれに擬えることはよく見られる。邵康節の詩集『擊壤集』は、鷲峰の愛読した書物で、その中の詩は鷲峰が詩作するときの見本でもあった。鷲峰は邵康節の最も特徴的な「～吟」という詩体に倣って、多くの「～吟」詩を作り、それらの詩の中からも彼の吏隠の精神が見出され、邵康節の影響、白居易の影響を確認することができる。さらに読書への隠逸や、別荘訪問の隠逸などさまざまな隠逸の形が鷲峰にあったことも提示したい。司馬温公や白居易などの詩人と違って、邵康節は生涯仕官せず詩人と学者を貫いた人物で、この人物から多大な影響を受けたことは、大きな意味がある。

8. 琉球漢詩人蔡大鼎と薩摩の歌人八田知紀の交流—「寄賀桃岡夫子拳太学歌」を中心に—

紺野 達也(こんの・たつや)

神戸市外国語大学 准教授

琉球王国末期の漢詩人である蔡大鼎(1823～1885以降)は琉球において対清外交を担ってきた久米村の士族の一人であり、最晩年には琉球処分に「抵抗、するために清にわたって客死したとされる。また琉球の歴史上、最も多くの作品を遺した漢詩人でもある。

蔡大鼎の漢詩文については、2012年以降、発表者等によって『欽思堂詩文集』など蔡大鼎の漢詩文集や関連資料が大規模に「再発見」された。それらの資料に収録されている作品のほとんどは彼が琉球国内で詠った漢詩文であり、そのなかには日本人に贈った詩も含まれていた。その結果、大陸との関係に重点が置かれていたこれまでの琉球学・沖縄学における蔡大鼎のイメージとは異なる姿があることが明らかになろうとしている。

発表者は「開かれつつある琉球漢文学の新たな世界—蔡大鼎の作品を中心に」(琉球大学編『知の源泉やわらかい南の学と思想 5』(沖縄タイムス社、2013年))と題した小文で、蔡大鼎が薩摩出身の歌人である八田知紀(1799～1873、号は桃岡)に贈った「寄賀桃岡夫子拳太学歌」(『続欽思堂集』所収)の存在に言及した。八田知紀は琉球歌人の出る宜湾朝保の師であるなど、琉球との関係が深い人物であるが、この「寄賀桃岡夫子拳太学歌」はこれまで全く知られていなかった。

前述の小文では、『続欽思堂集』の発見直後ということもあり、両者の交流について十分な検討を加えることができなかった。そこで、今回はこの「寄賀桃岡夫子拳太学歌」を丹念に読み、あわせて関連資料を検討することで彼等の交流の実態について改めて考察したい。そして、この考察によって、19世紀後半、すなわち琉球処分直前の日琉間における和漢の文学交流についての理解がいつそう進むと期待される。

【特集4】大江匡衡(出口誠・呂天雯)

9. 大江匡衡の漢詩文における太公望像

出口 誠(でぐち・まこと)

太公望呂尚といえ、老齡にして渭水で釣りをしているところを文王に見いだされ、太師として文武二代を補佐した伝説的な軍師である。——このような太公望像は和漢兩朝において見られる。曹植「求自試表（二首の二）」に「夫相者文徳昭者也、将者武功烈者也。（中略）昔伊尹之為滕臣至賤也、呂尚之處屠釣至陋也」とあるように、中国では「将」、すなわち武官としての太公望像が形成され、平安時代の漢詩文においても背くことはない。ところで平安時代中期の漢詩文を概観すると、太公望の引用は大江匡衡（952～1012）に集中していることがわかる。ただし大江匡衡に関しては、「寿考対策」においては、従来の太公望像どおりの故事引用がある一方で、特異な用例が現れる。一例をあげると、長徳2年（996）の「申越前尾張等守状」では、「彼呂尚者屠釣之賤老也、説文韜而礼遇無双。（中略）明王擢文士、不憚衆議者也」と、太公望は文韜を説いた帝師、すなわち文士であると捉えているのである。

本発表ではまず、このような表現が形成された由来を検討する。太公望の著した『六韜』は、たとえば『日本国見在書目録』によれば「兵家」に分類されている。よって本朝においても太公望が兵家として認識されたという前提は覆らない。それゆえ紀伝道文人に特有の事情があって、日本独自の受容が生じていったものとも考えられるが、大江匡衡が侍読の職に対し、並々ならぬ思い入れがあったことが大いに作用したものであろう。さらには、対策及第の後ながら不遇であった自己を、太公望に重ね合わせたという事情も想定される。また大江匡衡より後、具体的には院政期までの用例についても詳細に検討し、文士としての太公望像が継承されてゆく様態についても明らかにする。

10. 帝師としての大江匡衡—漢代桓榮の故事の利用から考える

呂 天雯(ろ・てんぶん)

早稲田大学教育学研究科 博士課程

桓榮（字は春卿）は後漢の儒者である。『後漢書』「桓榮列伝」によると、桓榮は六十歳あまりにして初めて大司徒府に務め始め、後に光武帝に召され、皇太子即ち後の漢の明帝に『尚書』を教授した。太子少傅、宗廟祭礼を司る太常を経て、漢の明帝に師礼をもって尊ばれて厚遇を受けたのである。桓榮の故事は後世の類書や詩文などに散見される。

大江匡衡の詩文には桓榮の故事を詠み込んだものが十例もある。彼は桓榮の故事を好んで使っていたと考えられる。本発表では、大江匡衡における桓榮の故事の位置づけ、彼の桓榮の故事に接したルート及び彼が繰り返して桓榮の故事を使った意図に迫りたい。大江匡衡が詩文の中で、桓榮の帝師であることや漢の明帝によって厚遇されたことを繰り返して詠じている。それは、彼自身的一条天皇、皇子の侍読としての身分に共鳴を覚え、一条天皇の厚遇を望んでいる意思を明らかにするためだろうと考えられる。桓榮の故事は中国の類書『北堂書鈔』『芸文類聚』『初学記』などに収録され、詩文にも詠まれている。大江匡衡が桓榮の故事を知ったルートは『後漢書』や類書などに違いない。藤原道長が大江匡衡に贈った詩にも「桓榮昔者猶応劣」（桓榮 昔はなほ応に劣るべし）（『江吏部集』七十番詩詩題）とあるため、桓榮の故事は平安時代の文人に親しまれていたと推測される。一方、現存する平安朝漢詩文では、桓榮の故事を詠み込んだ詩文がほとんど見られない。桓榮の故事の利用は博士家を背負う大江匡衡にしか見いだせない心情の現れだろうか。

「漢の明帝」の「明」は「明主」と連想させることから、大江匡衡が漢の明帝の故事を通じて、一条天皇を賛美することを意識していたことも考えられる。大江匡衡は桓榮の故事に自分自身と一条天皇への思いをともに託していると言える。

11. 錢稻孫の枕詞の翻訳について

孫 伏辰（そん・ふくしん）

西安交通大学外国語学院 博士課程三年生

中国における和歌翻訳の研究は1970年代末から本格的に行われているが、枕詞の翻訳の研究は案外少ない。それは枕詞の本質と機能の研究が不十分であるためか、翻訳の研究も重視されていないと考えられる。錢稻孫は枕詞に関する論述は1937年から1949年の、民国期の雑誌から見られたが、『万葉集』の翻訳をきっかけに、その重要な修辭法としての枕詞の翻訳も積極的に試したのである。本研究では枕詞を約200程度も収録された『万葉集精選（増訂本）』を分析し、主要な翻訳手法は以下のようにまとめられよう。

1. 同化。枕詞を原意のまま訳し、中国人読者に原歌の特徴を伝えようとする。訳文は文言であると、二文字か三文字で枕詞本来の洗練された形式を表現した。短いから意味が通じない場合、錢氏が詳しい解釈を添えた。一方、訳文は白話であると、五文字程度にし、原歌の枕詞の五音に対応させようと、錢氏は考えた。
2. 異化。枕詞の原意を別の意味の言葉に替え、中国人読者に原歌のイメージを伝えようとする。
3. 無視。

訳されていない枕詞は50余りある。そのほとんどは語義不詳や被枕詞と音のつながりだけあるものである。それらをむりやり訳せば、読者には違和感を感じさせ、訳さないほうがかえって訳歌の全体の意味を損なわないように思う。錢稻孫は枕詞のもつ修飾や美化の機能と、暗喩的性格を生かした訳語を工夫した。枕詞の翻訳手法を通して、常に原歌を踏まえ、訳歌の読者と原歌の作者との距離を縮めようとする錢氏の努力がうかがわれる。

12. 俳句漢訳の数値化評価方式について再論する—金中教授『日本詩歌翻訳論』をめぐって—

劉 欣佳（りゅう・きんか）

西安交通大学 修士課程一年生

俳句漢訳における評価方式については、西安交通大学の金中教授は統計学的な観点を引入し、所記側面の「意義」と能記側面の「風格」の両観点によって、その中の各要素を考察した。また各要素の重要性を論じて重み付き思想を導入し、さらに内容と形式と文辞の三方面に基づいて公式を展開し、俳句における数値化評価の可能性を示した。

金中教授は『日本詩歌翻訳論』で、「二（三）五（七）」型俳句訳法を主張している。本研究では、まず「二（三）五（七）」型俳句訳法を手がかりにしながら、意義の再生と風格の現地化の両視点から、数値化評価の元になった翻訳観を分析する。

しかし、評価者の主体性を考えた場合、数値化評価における「文辞」指標の主観的な側面も無視できないので、本研究は主・客観を区別して、「文辞」指標の含まれた「平仄」要素の属性を考察し、「形式」指標の一部分に属させ、評価公式の内部構成を調整する。

評価公式の調整に従って、重み付きも調整すべきである。本研究は統計学的な思想に基づいて調整済の各指標の重要性を検討し、改めて重み付けする。

なお、本来の「文辞」指標の内部における各要素の評点標準は未だ明確ではないので、調整関係の指標に対する評点方式を再考する必要がある。

本研究は、『日本詩歌翻訳論』における翻訳観を交え、評価公式の構成と重み付きの方式と各指標の評点標準の三方面によって、俳句漢訳における数値化評価理論の洗練化を目的とする。

13. 『日本書紀』における漢籍の影響と表現—天武天皇の記事と『楚辞』の「惜誓」との関わりをめぐって

鄭 家瑜 (てい・かゆ)

台湾国立政治大学日文系 副教授

古代東アジアの世界では「漢字」が最も重要な伝播の「媒介」であり、漢字を通じて漢文を中心とした東アジアの共通文化圏が形成されていた。『日本書紀』もこのような土壌の中で生まれた。『日本書紀』は全書に互って漢字で表記されているのみならず、漢籍による潤色が大量に加えられている。『史記』をはじめとする漢籍の語句、語法、文章の構造、思想などが多く取り入れられた。漢籍が『日本書紀』の形成において重要不可欠な要素であることは言うまでもない。

しかし一方、『日本書紀』は『古事記』とは異なる世界観を持っているため、記紀の物語は各書の文脈に沿って理解すべきである。『古事記』と多くの物語が重なっているとしても、『日本書紀』は自らの編纂意図があり、一つの「作品」として捉えなければならない。だとすれば、果たして、『日本書紀』は如何に漢籍の語句、典拠、思想を「使用」していたのであろうか。『日本書紀』はそれを通して何を語ろうとしているのか。『日本書紀』各巻には漢籍典拠の用いられた実態はいかなるものか。これらの問題について、先行研究では必ずしも詳細な論考がなされているとは言い難い。『日本書紀』における漢籍の影響と表現については更なる研究の余地があると思われる。

したがって、本稿では『日本書紀』における漢籍の影響と表現を考察する作業の一環として、日本古代王権の成立に大きく関わっている天武天皇の記事（『日本書紀』の巻28、29）を取り上げ、それが『楚辞』に収録されている「惜誓」という文章との関連性を探ってみたい。

【特集6】テキストと蔵書形成(合山林太郎・恵阪友紀子)

14. 野口寧齋と在清日本人のネットワーク—文廷式との交流・蔵書形成—

合山 林太郎(ごうやま・りんたろう)

慶應義塾大学文学部 准教授

野口寧齋(慶應3年(1867)～明治38年(1905))は、明治中期、東京漢詩壇で詩人として活躍し、森槐南の高弟として知られた。漢詩以外にも小説批評をよくし、森鷗外『舞姫』についての批評は、鷗外自身から賞賛の辞を得ている。また、後年において、ハンセン病を患いながら文学活動に従事し、当時、正岡子規とともに病詩人の双璧と目された。

寧齋は病のため、実際に中国に赴くことはなかったが、清と関わりが深かった田辺碧堂、白岩子雲、牧放浪、伊東壺溪、永井禾原らと深い親交を結んでおり、彼らを通じて、明治30年代(1900年代前半)、清の文雅の動向について知識を得ていた。

具体的に述べるならば、まず、寧齋は彼ら在清の日本人を介して、清の文人と交流した。翰林院侍読学士などをつとめ、学者文廷式との交流はその一例である。寧齋は、明治33年6～7月、文廷式の半生や逸事についてまとめた記事を、当時ひろく読まれた博文館の『太陽』に発表し、また、明治34年4月に、田辺碧堂、白岩子雲を介して、文廷式に書信を渡した。文廷式は、寧齋への返信し、自身のことを思ってくれる寧齋に対して謝意を表するとともに、彼の病褥における詩作を励ましている。

また、寧齋は、江浙の日本人を通じて、漢籍の収集を行っている。寧齋の蔵書は現在早稲田大学図書館に蔵せられ(寧齋文庫)、大隈重信や諫早家崇らからの寄贈による書籍や書肆から購入した書籍が含まれているが、当時、杭州で活動していた伊東壺溪が、寧齋に書籍の入手状況について報告を行っていることからもうかがえるとおり、その蔵書形成に関しては、渡清した日本人たちの貢献が大きかった。

明治中後期の清と日本の文人との交流は、官民様々なルートがあるが、寧斎の場合、在清の日本人ネットワークから大きな支持と援助を受けていたことが特徴である。こうした関係がなぜ生まれたのか、また、そこで漢詩がどのような役割を果たしたのか、といった問題についても考察する。

15. 『和漢朗詠集』多賀切の享受

惠阪 友紀子(えさか・ゆきこ)

京都精華大学 特任講師

『和漢朗詠集』の多賀切は、陽明文庫に下巻奥書部分が伝わる断簡で、元は卷子本、藤原基俊が永久4年(1116)に書写したことが知られる貴重な資料である。『和漢朗詠集』の伝本は、粘葉本を始め、平安時代に書写された完本が複数存在するがいずれも、唐紙や下絵などの装飾料紙を用いた華麗なもので、調度品としての趣が強く、本文にはやや問題があるといわざるを得ない。また、『和漢朗詠集』は鎌倉期以降にも数多く書写され、数え切れないほどの諸本が現存するが、配列の移動、誤写誤脱なども多く、諸本系統が整理されているとはいえない。このような状況で、基俊の多賀切は書写者・書写年がわかるだけでなく、詳細な詩題注が付されているなど、研究的な書写態度が見られるものであり、本文享受を考える上では欠かせない資料である。断簡でしか伝わらず、全容が知られないのが惜しまれるが、堀部正二は昭和14年に頒布された複製本『伝藤原定頼筆和漢朗詠集山城切』(のち、『校異和漢朗詠流』大学堂書店・昭和56年)の諸本解題において、「前田公爵家所藏傳寂然法師筆本は多賀切と極めて密接な関係を保ち、共に同一系統のもの」と知られる」と指摘している。また、中世以降の写本を調査したところ、関西大学図書館蔵生田文庫本が多賀切に近い本文を有していることが判明した。生田文庫本は、上巻のみではあるが、裏書として大江匡房の朗詠江注を持つ写本である。本発表では、多賀切と生田文庫本を中心に、多賀切本文の享受について考察したい。

【特集7】底流する言説(李現・谷口孝介・丹羽博之)

16. 菅原道真の斉物観の形成—「北溟章」をめぐって—

李 現(り・げん)

京都女子大学大学院 博士後期課程

『莊子』の郭象注は、平安時代の文人官僚たちの漢詩創作に影響を与えている。例えば、寛平2年(890)、讃岐の守の任期を終えて京都に戻った菅原道真が作った『莊子』逍遙遊篇を題材とする3首の連作「北溟章」、「小知章」、「堯讓章」(333~335)においては、郭象注と初唐の道士成玄英の疏の表現が使われている。しかし、連作に於ける『莊子』の摂取は、注疏の表現に止まることはなく、注疏の深層思想を体系的に把握した上で、その思想の中核を忠実に詩の中で反映していると考えられる。そこで本発表では、連作の第一首「北溟章」に見える逍遙遊篇の故事と斉物論篇の思想はいかに疎通しているのかという点に着目する。道真は、郭象注に基づき、逍遙遊篇の「二虫」を原文と意味を異にして、大鵬と蝸と見なしてその生活を描いている。「北溟章」に見える偉大なものと卑小なものそれぞれの価値を認めて、自分の個性に満足すれば逍遙の境地に至れるという、小と大を同一視する斉物観は、斉物論篇の主旨と共通している。逍遙遊篇の故事を利用して卑小なもの価値を認める作品は、郭象以前に、張華の「鷦鷯賦」(文選巻13)があり、道真の16「和春十一兄老生吟見寄。次韻」に影響を与える。「鷦鷯賦」の文末の李善注は、もの大と小を説明する際に、秋水篇の内容を取り上げており、同じ内容は斉物論篇の注疏にも見える。つまり、李善は逍遙遊篇、斉物論篇、秋水篇の呼応関係を意識して「鷦鷯賦」に注を付けている。道真の515「秋湖賦」もこのような『莊子』各篇の内部関係に注目し、秋水篇の素材を利用しながら、斉物論篇の思想を表わしている。そして、白居易の3662「禽虫十二章」の第二章も逍遙遊篇の素材を使って斉物思想を表現

する。本発表は、「北溟章」を糸口にして、道真の斉物観は、「鷓鴣賦」、郭象注から白居易までの経路に繋がっていることを示したい。

17. 説話の語り変えと聖遺物—聖徳太子南岳取経説話をめぐって—

谷口 孝介(たにぐち・こうすけ)

筑波大学人文社会系 教授

東京国立博物館現蔵の国宝「細字法華経」(N7)は、同館蔵国宝「聖徳太子絵伝」(N1)と並称される「法隆寺献納宝物」の中核をなす文物である。奈良時代より法隆寺に伝来しており、他の宝物群と一括して明治 11(1878)年に法隆寺から皇室に献納された由来を持つ。この経巻についてすでに奈良時代より、聖徳太子の前身、南岳大師慧思の衡山における持物であるとの伝承が存在したようである。それがどのようにして日本に将来されたのかについて、平安時代初頭から小野妹子の隋への派遣とからめて説話が語られてきた。その点に注目して聖徳太子諸伝を通観してみると、当初「上宮皇太子菩薩伝」(『延暦僧録』)においては、太子が使者を派遣して前世に南岳において持誦していた「法華経七巻一部」を将来させたことになっている。それがすなわち「細字法華経」だとするシンプルな説話である。ところが平安初期の『上宮聖徳太子伝補闕記』では、太子が七日七夜三昧定に入って取得したものが前世持誦の真経であり、皇極 2(643)年 10 月 23 日に忽然と消失したという。ついで『聖徳太子伝暦』においても同断であって、真経が消失した年次が推古 35(627)年という違いがあるのみである。国宝「聖徳太子絵伝」もほぼその内容を絵画化している。いずれも太子前世所持の真経は失せて、法隆寺に伝存するいわゆる「細字法華経」は、妹子の将来した「弟子経」だとする。

この説話の語り変えの契機は聖遺物として法隆寺に伝存した「細字法華経」そのものにあると考える。その書写奥書紀年に「長寿三(694)年六月一日」とあることが、語り変えの動機となったのである。つまり太子薨後の紀年を持つ経巻の聖性保持の志向性が、紀年の整合性に関わって説話の語り変えを促すこととなった。

18. 日本と中国の梁燕

丹羽 博之(にわ・ひろゆき)

大手前大学 教授

梁燕は日本と中国で別々の意味を持つが、本発表ではその淵源をたどる。

中国に於いては、梁燕は小人物の意味である。

『漢語大詞典』には、次のようにある。

梁燕「梁上の燕。比喻小才 五代 王定保 唐摭言・「別頭及第」：時楊知至 因以 長句呈同年曰
由来梁燕与冥鴻 不合翻翔向碧空

この梁燕のイメージは、『史記』(陳涉世家)の有名は「燕雀安鴻鵠之志」の言葉によるものであろう。

一方、日本では「梁(うつばり)の燕」は、『日本国語大事典』(二版)には

梁に巢を作り雛を育てる燕の意で、我が子を思う親の愛情のたとえにいう。

(用例) 謡曲「丹後物狂」幸若・山中常磐

とある。

謡曲「丹後物狂」(岩波旧大系)には

それ親の子を思ふこと、人倫に限らず、焼け野の雉夜の鶴、梁の燕に至まで、子ゆゑ 命を捨つるなり。

とあり、頭注に

「幸若舞の山中常磐に「梁の燕も子ゆへ小蛇の餌とはなる」とあるが、典拠不明。

とあ。

これら日本古典の「梁燕」は、白詩の「燕詩示劉叟」(0041)に拠るものであろう。

燕の子育てを生き活きと描写した後、結局は雛たちは成鳥すると親を捨てて、四散し親を嘆かせるという内容で、子が自分から去ったことを嘆く劉叟に、自分も若い時 には、親を捨てたではないかと論じたもの。

この詩は、『菅家後集』に、「紫燕之雛黄雀児」（「詠楽天北窓三友詩」477）と利用されており、中世においても、謡曲などでは、「焼け野の雉」「夜の鶴」と並んで子を愛する親の愛の譬えとしてよく引かれる。更に漢詩にも

燕吟午静小窓間 辛苦営巢幾往還
対主喃喃説何事 去年人易去年顔

『翰林五鳳集』（巻三） 熙春

と詠まれている。これら日本の燕のイメージは 20 世紀まで脈々とうけつがれた。

1945 年学徒出陣で戦死した、真鍋真次郎氏の姉宛の手紙にも白詩が引用されている。

【特集8】セッション 運命(相田満・三田明弘・藏中しのぶ)

はじめに

計り知れないのが人の運命である。短命・長生・幸運・奇禍など、古来より人々は、その宿命の由縁を、神仏、先祖の営みや前世の業などの、自身に起因しない外在的な因果に理由を求めてきたといってもよからう。そして、その因果関係にまつわる言説が多く残されてきた。本セッションは、発表者達が取り組んできた研究プロジェクトの主要テーマとなる「観相と供養」（相田）「鬼文化」（三田）「伝と肖像」（藏中）などを切り口として、そこから「人の運命」に関わる話材や事象に適用してみたい。そして、こうしたコラボレーションから生まれる視点からあらたなる研究の発展を期するものである。

具体的には、以下の三者の概要の通りである。

なお、本発表は科学研究補助金挑戦的萌芽研究「観相資料の学際的研究—マンガも視野に入れた古籍観相資料の分析と応用—」および基盤研究(A)日本における「生き物供養」「何でも供養」の連環的研究基盤の構築」(代表・相田満)、同基盤研究(C)「鬼文化・冥界表象からの日中比較説話文学史の構築」【研究課題番号:26370432】(代表・三田明弘)、同基盤研究(C)「古代寺院における「伝」と「肖像」の制作活動—長安と平城京の諸寺院間ネットワーク—」【研究課題番号:16K02373】(代表・藏中しのぶ)の研究成果の一部です。

19. 声で定命を知る観相譚—『今昔物語集』6-48 震旦童児聞寿命経延命語を手がかりに—

相田 満(あいだ・みつる)

国文学研究資料館・総合研究大学院大学 准教授

身体・容貌・所作などから、その人の性質や運命を予見する「観相」に長けた人のことを相者というが、標題の『今昔物語集』巻六-第48 震旦童児聞寿命経延命語と、その典拠『三宝感應要略録』中37は、観相譚の中でも声で寿命を知る次のような話がある。

ある日、相師は門外に命が旦夕に迫っている人の声を聞く。声の主はわずか十三歳の童児の声であることがわかり哀れに思った。翌日、同じ童児に再会した所、それは七十余歳の寿命を持つ人のものなので驚いた。理由を問うと、寄宿する僧坊で「寿命経」を聴いたという。相者は仏法が相術を超越することを悟った。

『要略録』は再した童子の声が寿相に変わっていたとし、『今昔』は容貌が寿相に変わっていたという点が異なる。『今昔』で最終的に人相によって余命の変化を知ったことになっているのは、当時の観相の有様を反映した改変が行われたのではないかと考えられる。

しかし、観相の蘊奥が記されたとされる相書には、現存の相書を読んでも「声」による観相は記されている。たとえば、敦煌文書『許負相書』(一部残簡(P2572(A))など)や日本に伝存する現存最古の相書『集十二家相書』にも声部が立てられており、唐宋代にはすでに「声」の観相が存在したと知れる。それな

のに『今昔』で童子の延命が判明した判断材料が、声ではなく人相となったのは、作者の認識では声による観相が信じられなかったために改変されたと考えられ、当時の観相に対する認識が反映したものと見られる。

管見に入った相書の「声」の記述を見ると、薄幸・短命の兆を示す相はあるが、長命を保証する記述は乏しいことがわかる。同時代の日本では相術に長けた人には貴紳の者も少なからずいたことから、『今昔』の編者は相術の実態を知悉した上で、叙述の変改を行った可能性が考えられるのである。本研究は JSPS 科研費 JP15K12853,JP16H01760 の助成を受けたものです。

20. 『太平広記』及び日本の説話集における定数説話の特徴

三田 明弘(みった・あきひろ)

日本女子大学 教授

『太平広記』では、巻一四六から巻第一六〇までの十五巻は「定数」を標題とする説話群となっており、人間の定められた運命に関する説話がまとめられている。そして続く三巻は、巻第一六一・巻第一六二が「感応」、巻一六三が「讖応」となっており、これらも運命と予言についての話群となっている。

本発表ではこれらの『太平広記』定数説話群の各話を分析し、巻一四六から巻第一六三の排列意図を明らかにすると共に、定数説話の話型の分類を行い、宋代以降の定数説話の展開についても『夷堅志』『聊齋志異』等を材料に言及する。

そして、『今昔物語集』『古今著聞集』などの日本の説話集に見られる運命や予言に関する説話が、その話型やモチーフにおいて、中国の定数説話からどのように影響を受け、また如何なる独自性が見られるのかを考察する。

その上で、定数への関心が幽霊譚(鬼話)においても、重要な説話の構成要素となっていることを論じる。

21. 渡来僧の運命－奈良時代の「伝」と〈仏教東流〉－

藏中 しのぶ(くらなか・しのぶ)

大東文化大学 教授

日本の伝記文学、ひとりの人物について詳細な伝記叙述をとまなう本格的な「伝」は、奈良時代の八世紀後半、渡来僧の高僧伝に始まる。ことばで記された二次元の文学「伝」は、かたちある三次元の肖像彫刻「肖像」として立体的に立ちあがり、車の両輪のように両者相俟って、高僧の姿を後世に伝えるよすがとして機能した。

高僧の「伝」と「肖像」の制作が日本で最初に確認されるのは、唐僧鑑真の「大和上之影」と鑑真伝三部作『大唐伝戒師僧名記大和上鑑真伝』『唐大和上東征伝』『延暦僧録』、インド僧菩提僊那の「像」とその像賛『南天竺婆羅門僧正碑并序』であり、いずれも渡来僧を対象とする。天平八年(七三六)唐僧道璿・林邑僧仏哲と共に来朝し、官大寺である大安寺に住した菩提僊那が天平宝字四年(七六〇)二月二五日大安寺で入滅し、また、天平勝宝五年(七五三)来朝した鑑真が天平宝字七年(七六三)五月六日唐律招提(唐招提寺)で遷化すると、弟子たちは師のために「肖像」を造り、「伝」を述作した(『シルクロードの東と西をむすぶ－文学・歴史・宗教の交流－』を終えて一伝と肖像・鑑真和上と婆羅門僧正菩提僊那一『文学語学』218号、2016年)。

天竺から中国へ、また、中国から日本へと渡来した高僧たちの「伝」には、共通する運命が描かれ、その出典は複雑に絡み合っ〈仏教東流〉の歴史を紡ぎだす。渡来僧の運命が、「伝」の作者でもあった弟子集団の教学思想を如実に反映しつつ、相互に補完し合っている様相をあきらかにしたい。

本研究は、科学研究費補助金基盤研究(C)「古代寺院における「伝」と「肖像」の制作活動－長安と平城京の諸寺院間ネットワークー」【研究課題番号:16K02373】(代表・藏中しのぶ)の研究成果の一部です。